

2 モントローズ侯の処刑

I.

ここへおいで エヴァン・キャメロン
わたしの膝のそばへおいで
聞こえてくるは川が唸り
冬の海へと流れ出る
山腹に木霊する叫び声 5
吹きすさぶ風の中に 戦の音
懐かしい面々がわたしを見下ろす
懐かしい軍隊が行きすぎる
聞こえてくるはバグパイプの哀しい音色
戦の騒ぎにまじって響き 10
この老いぼれの魂をまたもや覚ます
夜はこれから更けゆくものを

II.

ハイランドの 兵 率いたはこのわたし
ロソホアーバーの雪の荒れ狂う中
プレード纏って山駆け下り 15
モントローズと共に戦った
イングランドの 輩 がみな
われらが太刀の餌食となった
キャンベル一族をインヴァロキの岸に倒し
ダンディーを席卷し 20
リンジー一族の鼻をあかしたこと
すでにお前に語ってきかせた
だがまだお前に語っておらぬ
偉大なる侯爵殿の死にざまは

III.

裏切り者が侯爵殿を売ったのだ 25
死をもってしても雪がれぬ恥
お前に託そう もしもお前が
アシントの名を持つ者に出会ったら
そこが山腹であろうとも
そこが溪谷であろうとも 30

戦の身支度整えた たった一人であろうとも
一軍率いていようとも
怯むでないぞ わが父の
敵かたき と思うて立ち向かえ
己の血筋を忘れるな 35
卑怯者を打ち果せ

IV.

侯爵殿はウォーターゲートへひき立てられた
麻ひもできつく縛られて
身を守る術なき人でなく
獅子でも縛るかのように 40
車の上に晒された侯爵殿のその下を
処刑人が馬で行く
後ろ手に縛られて
気高き額は露わになった
鎖を逃れた獵犬いぬ 追うごとく 45
たきつけられた有象無象うぞうむぞうが
野次と罵声で侯爵殿を
絞首台へと急きたてた

V.

いかに勇敢な心でも
哀しく沈んだことだろう 50
悪意に満ちた目という目が
己が身に注がれるのを見ては
バルコニーには西国の
長老派の領主たち
枯れ木のようなその妻や 55
娘たちが居並んだ
開け放たれたあらゆる窓に
黒衣まよを纏った盟約者らが
この場かぎりの戯れを
一目見ようと群がっていた 60

VI.

だがやってきた侯爵殿は
青ざめるともあまりに崇高
雄々しい額はあまりに高貴
見据えるその目はあまりに静か
野次馬どもは叫ぶを止めて 65

みな一様に息を呑み
死を覚悟した英雄の
魂しかと受け止めた
身も震わんばかりの哀しみが
次第次第に伝わって 70
侯爵殿を嘲り集うた者たちまでも
顔を背けて涙した

VII.

前へ 前へと
静けさと憂いに満ちた
哀しみの列は進んで 75
宿命のあの館へとやってきた
嘲けり笑う声の中
ひときわ響いた女の野次を
制せんとする怒りの声が
群衆の中から轟いた 80
侯爵殿が顔を上げ
見上げた先には醜い^{びしょう}微笑
王を金で売った男
悪の権化アーガイル

VIII.

じっと見据えた侯爵殿が 85
何も語りはされずとも
アーガイルは青ざめて
侯爵殿から顔を背けた
そばにいた厚塗^{ぼいた}り売女は
恐ろしさに身を震わせた 90
^{いかずち}雷にも似たどよめき流れ
かたい拳が突き上げられた
声をあげたはサクソン兵
「下がれ 腰ぬけ その場から
七年もの長きにわたりこの方を 95
避け続けてきた者よ」

IX.

わが一族五十人と
剣さえこの手にあったなら
エディンバラの目抜き通りで
関^{とき}の声挙げていたものを 100

荒れ狂う馬一群とて
鎧を纏^{まと}った兵一団とて
南のあらゆる反逆者とて
われらを退けられはしなかったろう
いま一度ハイランドのヒースの上を 105
あの方が自由に歩めるならば
私と私の名をもつすべての者は
お傍^{そば}にお仕えするものを

X.

それも叶わず侯爵殿は
議事堂へと引き立てられた 110
古^{いにしえ}のスコットランドの王たちが
傳^かかれていたところ
今では卑しい足のまき散らす
塵で床は汚^けされて
誓いを破った裏切り者に 115
善き者の座は奪われた
虎の威を借るワリストンが
非道な裁きを読み上げた
偉大なるモントローズが
場の中心で立ち上がった 120

XI.

「礼帯^{れいたい}の騎士の誓いにかけて
我らの背負うこの名にかけて
我らが頭上に翻る
聖アンデレの十字にかけて
いや それではとても足りぬ 125
かけるべきは大きな誓い
お前とわたしの間に流れる
高貴なる血にかけて
わたしは決して戦場^{いくさば}で
栄冠求めはしなかった 130
また死にゆく時ととも
殉教者の誉れなど求めはしない

XII.

「彼方には勇ましく
正しき者の眠る場所
その父の墓所よりも 135

わたしにはここが相応しい
信と義のため裏切り者に
いつもこの手を揮^{ふる}ってきた
最後の正義の証として
天と地にこの手を掲げよ 140
頭は塔に釘付けし
四肢は此方^{こち}此方^{こち}に^てくれてやれ
神がすべてをお集めくださる
わたしが天に召される時に」

XIII.

暁が暗闇に覆われて 145
突然雨が降り出した
^{いかずち}雷^{ぎざぎざ}の刻刻の閃光が
暗い街を照らし出し
雷鳴が天に轟いて
運命の時がやってきた 150
くぐもった太鼓の音^ねが鳴り続け
最期の時の到来告げた
地には狂気
天には怒り
老いも若きも 富者も貧者も 155
侯爵殿の最期を見にやってきた

XIV.

ああ神よ 身の毛もよだつ絞首台
巨大な亡霊 しゃれこうべ
見るもおぞましきその姿
その梯子と絞首門 160
聞け 聞け 武具の擦れ合う音を
死を告げる鐘が鳴る
「あの方がやってくる あの方がやってくる
神よ その魂に恩寵を」
^{いかずち}雷^{ぎざぎざ}が尾を引くように轟いて 165
雲が去り空は晴れ
燦然たる太陽が
再び大地を照らし出す

XV.

「あの方がやってくる あの方がやってくる」
花婿^{いでま}が出座するように 170

牢獄から英雄が現れて
 向かうは運命の絞首台
 額には栄光を
 瞳には輝き湛え
 死にゆく今よりも荘厳な御姿は 175
 かつて戦場^{いくさば}でさえ見なかった
 色合のよい侯爵殿とは裏腹に
 皆の顔は青褪めた
 眼前をゆく侯爵殿の
 なんと見事な男^{おのこ}であるか 180

XVI.

侯爵殿は絞首台の上に立ち
 集まった人に顔を向けた
 彼らは人を信じぬ者たち
 それゆえ侯爵殿は黙して語らず
 ただ仰ぎ見た天空は 185
 一点の曇りなく
 澄み渡り
 神の眼^{まなこ}が輝き放った
 丘の上には漆黒の
 寂寞^{せきぼく}たる胸壁が横たわり 190
 雷^{いかずち}がそこで眠るがごとし
 すべてはしんと静まった

XVII.

長老派の牧師たちが
 厳しい顔で近づいた
 瀕死の鹿に群がり寄る 195
 ワタリガラスの群れのごと
 侯爵殿は一顧^{いっこ}だにせず
 只々独り 跪^{ひざまず}いた
 絞首門の下 顔にヴェールがかけられた
 キリストの慈悲を求める者たちのため 200
 だが輝くばかりに厳かに 侯爵殿は立ち上がり
 顔のヴェールを打ち捨てて
 大地と太陽とこの一日^{いちじつ}を
 最期にその目に焼き付けた

XVIII.

赦^{ゆる}されし人を彩る栄光の 205

光一筋その身に浴びて
侯爵殿は高く聳^{そび}える梯子^{のぼ}を上った
天へとつづく道のごとく

雲間から突如稲妻閃いて

凄まじき雷鳴轟いた

210

心に宿る怖れのために

天を仰ぐ者はなかった

重々しい音ひとつ響き

訪れた静寂に呻き声

暗闇が空を覆い

215

死^{わざ}の業はなされた

(宮原牧子訳)